

役に立つかもしれないシリーズ 12

「中」

天台宗大黒寺住職 藤井圓隆（名古屋名駅RC）

前回は、「空」（くう）と「仮」（げ）についてお話をいたしました。

「空」と「仮」は相反するようですが、実はこれは円融と言いまして、まるで不可思議千万に溶け合って全く一つのように動くのであります。

即ち、あなたも私も「空」であり実体のない存在であるが、現実的には確かに物理的に存在しておる。叩かれれば痛い、汗も出るし血も出る。しかし、存在はしているが、明日をも知れぬ、まさに水面に浮かぶ泡沫のごとき儚い存在である。

「空」と「仮」を自由に行き来する。これが「中」（ちゅう）であります。般若心経では次のように言っております。

色即是空

空即是色

色は、この世の様々な物理的存在を意味します。これは、空である、即ち実体がない。しかし空ではあるが、それがそのまま現実（仮）である、即ち色である。

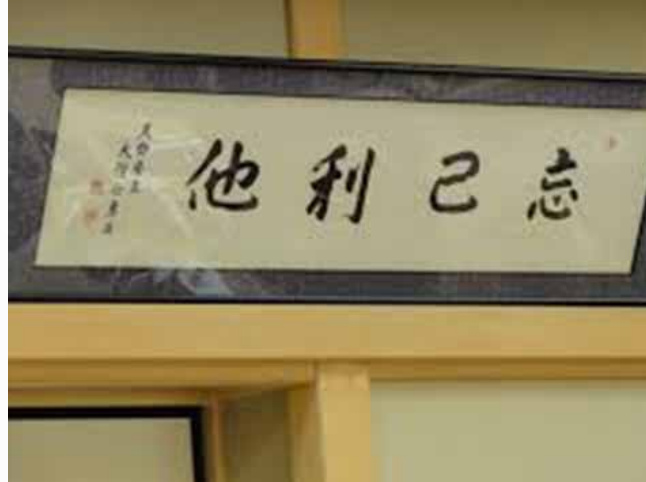
この空と仮を自由に行き来する。これが中であります。天台では、「円融三諦」というのであります。

死という観点からみると、一瞬一瞬、死に脅かされる人生ですがこれを常に意識して生きる、即ち、死につつ生きる。それは生ではあるが、死に直面した生である。先回お話しした「大死一番」の生きつつ死ぬであります。簡単にいえば覚悟であります。

「覚」は悟りを開くことで、覚悟ということは二重となっておりますが、覚悟するということは大體、死を覚悟するという意味で使われるのであります。死を意識しながら生きるというのは至難の技であります。瞬間に全身全霊をかたむけて生きるということであり、なかなかできることではない。

しかし、われわれが生きているのはこの一瞬であります。過去もなければ未来もない、信じられるのは今、生きているこの一瞬であります。この一瞬をいかに大切に生きるか、これが人生の最大の問題であります。

それにはどうしたらよいか。まず、自分から遊離することであり、自分のことばかり考えておると何も見えない。外から自分を見る。そして他人を見る。そうしたら今、何をなすべきかが見えてくる。



(第 255 代天台座主渡辺恵進書)

伝教大師最澄は、

「忘己利他（おのれを忘れて他を利する）は慈悲の極みなり」

とおっしゃいました。己を離れて初めて、外の世界がわかってくる。そして他人に優しくなれる。

悩んだ時は、自分を捨てる。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあり」という言葉がありますが、まさにそういうことであります。いいアイデアが浮かぶのは、そういう時であります。

日本人は、挨拶の時に頭を下げます。相手を敬います。それがどんな時でもそうします。おはようございます。ありがとうございます。あなたは大変えらいお方ですと頭を下げるわけです。それが、日本式の挨拶ですが、世界のどこにもない挨拶であります。他人をととても大切にする文化であります。あなたがあるから、わたしがある。縁起の思想であります。縁（よ）って起（お）こるから、縁起というのですが、相依相待の意味であります。自分はひとりでは存在できない、対象があるから自分の存在が確認できるというわけであります。この縁起という概念は仏教の根本をなす概念であります。この一言にすべてがあると云ってもいいほどの大事な概念であります。即ち仏教の相対性理論とも言うべき考え方であります。

他人を大事にし、他人に優しくすることが、即ち、自分を大事にするということである、これが仏教の教えであります。